

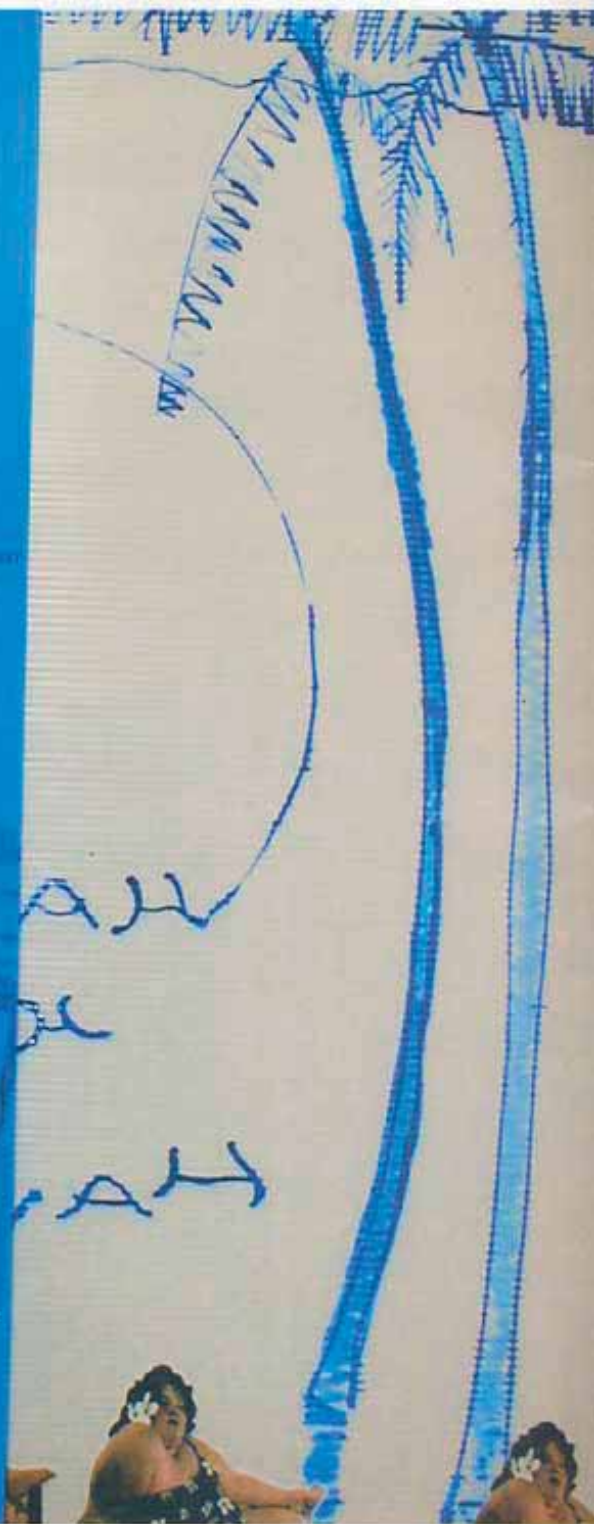
# 六花

俳句雑誌

りつか

9

*designed by Tamako Tanaka*



訪  
戴



山田六甲

長靴の干しあるかぼちや畑かな  
飛びかけて雀もどりし大暑かな  
六さま雨が蝉時雨ちや濡れて参らふ  
滝壺は滝に打たれてをりにけり  
蓮の葉に蓮華一枚二枚かな  
炎昼の何もなければ虫交む

母おはすところ涼しくみえにけり  
緑蔭に死ぬまで時間潰すかな  
湧水を大きな声で汲みにけり  
熊蟬にぢりぢり寄れる油蟬  
箱眼鏡透してみれば笑ふ魚  
羽抜鶏とさか機敏にふりにけり  
鉄棒の濡れてをりけり鉦叩  
伊予灘やその伊予灘の天の川  
一本の大樹と橋や秋の声

無鑑査同人作品

# 六 卿 集

(五十音順送り)

武具飾る

鳴海 清美

武具飾る引越し支度の片隅に  
関址の解らずじまひ柿若葉  
花桐や練堀つづく峠口  
鯉太る卯月曇の水匂ひ  
青枇杷や髪の三つ編揺らし過ぐ

老人力

二瓶 洋子

聖五月子の退職を待つて臥す  
 老衰の衰に波あり明け易し  
 うたたねの夫をまた見し若葉時  
 崩させて貰ふ膝なり藺座布団  
 雲の峰老人力の北斎展

脱皮して

松山 律子

男唄女唄秋はもう其処  
 大部屋の病それぞれ夏終わる  
 このままで老いてたまるかスイッチョン  
 病葉や物の数ではない死者とは  
 脱皮してへこき虫でもなるうかな

ゴッホ

小田 元

ひまはりのふくらみゴッホ見る事に  
 ゴッホ展つがひの蝶のまぎれ込む  
 ゴッホ展ひまはりの花数へをり  
 享子忌の近しひまはりとゴッホ展  
 氷水ごとくと黄色のカフェテリア

八月号正誤訂正 題字「境」「堺」

あめんぼ

梶浦玲良子

丸木橋低し夜濯ぎ明かりかな  
 右肩に痛みが残る蛇の衣  
 花枇杷の匂ひ集まり昼の月  
 ぎしぎしの花デジタルカメラ繁る  
 あめんぼをくぐりて水の流れゆく

落し文

木内美保子

億土から還られさうな海の虹  
 風に乗り一卷届く落し文  
 かたまりて薄暮に灯る月見草  
 裸婦像の指の先なる青葉風  
 峡晴れて水田に投げる早苗束

知らざりし

中村 房枝

夏萩にかくれて犬の小屋ありぬ  
 清少納言向日葵を知らざりし  
 今朝の秋橋のなかばで川覗き  
 わたくしにしては深酒夜の蝉  
 古扇子はつとするもの描きある

# 藤の花山のそよめきをりにけり いじり

山藤に風の重たく当たりけり  
垂れて藤揺れて藤なり絡み蔦  
流し目のやうな筆跡花の雨  
春惜しむ風化途中の石を手に

そよめくとは風や衣擦れなど物が  
ふれあつて鳴ること。藤の花が風に  
揺れる様を観ていて、山全体がそよ  
いでいると感じ取った。だが藤がそ  
よいでいると言わず、山がそよいで  
いると表現をしたのが手柄。源氏・  
空蝉に、にぎやかである、ざわめく  
という意味で、打ちそよめきてひと  
びと「云々と言うくだりがある。」



# 檀木集

トマト

林 裕美子

おひさまを浴びて太れるトマトかな  
寝転びて数へる鈴生りのトマト  
ラーメンのつゆ飲み干せり梅雨の明  
寂しさで人は死なぬぞ梅漬ける  
起き抜けに胡瓜のとげに刺されけり

梅雨晴間

松下 幸恵

梅雨晴間 こんなに近く淡路島  
つり橋や井たべてつゆ晴間  
四国までつり橋で行くつゆ晴間  
青海を見おろしながらつゆの晴れ  
梅雨晴間 舞子淡路を一望に

時刻表

松本文一郎

多く誉め少し叱りぬ聖五月  
山に入り山容見えぬ五月かな  
新緑や最新版の時刻表  
春雷や閉門近き東慶寺  
揚雲雀水切り競ふ三角州

# 菜根譚



山に入り山容見えぬ五月かな

松本文一郎

遠くから見れば山の容も見えるが、近寄りすぎるとその容を見失うことがある、となにやら格言めいているが、そういう内容なら川柳になりかねないけれど、五月の新緑に囲まれている心地よさを主眼として詠んであること、はつきり切れがあることから立派な俳句である。(川柳が俳句より劣るというわけではなく、ジャンルの区別だ。)

朝雀丹波の貌の豆植うる

三井 孝子

丹波の豆の貌とはいかなるものか。既に周知のとおり丹波の名産は黒豆で、高級ブランド。まさに粟に並ぶ丹波の貌である。私事ながら正月の煮豆に丹波の黒豆を使うが、何度か皺ができて失敗。試行錯誤、研究の結果最近ではふっくらと仕上がるようになってきた。

で、その秘訣は浸透圧を利用することだったので、半透膜で区切ると、濃度の薄い液体は濃度の高い液体へとしみ出していきます。このしみ出していく圧力を浸透圧といいます。というわけで賢明な読者はもうおわかりでしょう。なに？失敗したことのない人ばかりだったの？話がそれだが、丹波の貌は三井孝子だ！という時代が来るに違いない。しかし、三井さんの顔が豆のようだと言っているわけではない。(以下略)

寝ころびて数へる鈴生りのトマト

林 裕美子

トマトは蕃茄と書き、古名はあかなす・さんごじゆなす。TOMATEはスペイン語で、原産は南アメリカのアンデス高地。ファースト・トマト、チェリー・トマト、“チリエッジノ”と呼ばれるシチリア産チェリートマトなど品種が多く、掲句は日本でプチトマトと言われるチェリートマトかも。鉢植えの場合は地植えよりはこまめに灌水をしてやる必要があり、一日の灌水量は500ccまでだという。だが、そんなことは作品の上でなんら関係はなく、寝ころんでトマトの数を数えらるる風流さが伝わってくる作品。「じだらくに寝れば涼しき夕かな 宗次」に通うところもあって……。

# 六花集



六甲選

横山 迪子

通夜終へて卯の花くたしの中帰る  
自墮落にピリオド卯の花くたしかな  
走り梅雨ごひいきスターのバリトーン  
ひたすらに卯の花くたし猫眠る  
梅雨晴間猫縄張りを巡回す

浜田久美子

春日山に今立ち昇る夏の霧  
美しき人に教はり半夏生  
梧桐の苔生す寺や産湯の井  
梔子の香り満ちたる水の音  
洗ひ髪一つに束ね夏の月

わかやぎ  
すずめ

赤い糸茨の棘に絡まりぬ  
撫子や乱るる気持ち和まして  
涙する茜の空や夏夕べ  
夏の夜の夢で家族に会いにけり  
恋しくて鳴いているのか雨蛙